

● 小林隆児著

## 『関係の病としてのおとなの発達障害』

本書は、乳幼児のごく早期の母子関係をめぐる諸問題についての臨床に、永年にわたってたずさわってきた著者の集大成をなす著書であるといえようか。しかし、その題名は『関係の病としてのおとなの発達障害』となつている。それは何故か。

そもそも精神科の診断というのは大袈裟に言えば、何世紀もの歴史をもつていて、ずっと昔は一四〇〇くらいもの診断名があつた時代さえあつたのである。一方、精神医学そのものが医療一般において、その仲間入りをなんとか認められるようになったのは、比較的にいえばまあ最近といつてもいいくらいであろう。ICDは近く第一版が出版されるようだが、精神医学が臨床医学の一つ

の単位としてICDに取り入れられたのは第五版以来のことだったと記憶する。それ以前は精神科の疾患という項目はなかったのである。ICDは一〇年ごとに改定されることになつてはいるのだが、第一〇版が出たのは実に一九八八年だったから、もう三〇年も経つてはいるのである。

さて本書にもどつて、発達障害は例の悪名高いアメリカのDSMからはじき出されてしまったのだが、ICDの第一版では残ることになるらしい。それはともかく現在、日本では子どもから老人に至るまで、殆どすべての人に発達障害という名前が与えられるようになってはいる。しかもまったくもつてバカげているわけだが、発達障害はなんと精神病

に分類されていて、したがってそれはすべて脳の病気で不治だということだから、恐ろしいくらいの話だ。精神科以外の人々からみると、精神科医は何を考へているんだということになるだろう。

しかし、本書の著者はそのことにはあえて近よらず、ごく幼い子どもさんたちの「発達障害」について、

実にくわしく実証的にというか、キチンとした精神療法的なアプローチをもつて、「関係」という視点から解き明かしてくるのである。しかもごく幼いころの体験に根をもつていて、何年たつてからでも、そこから芽生えた個人的体験にもとづいて、その病跡がおとなのケースにもそのまま当てはまるのだと説くのである。このことは万人に共通してみとめられる事柄なのであり、精神療法にたずさわろうと志す人は、すべからずこのころのからくりについて通曉していることが求められているのだと強調してやまない（九州の

大学の学生さんたちの指導に際して、そのことの意味を強く感じられたというのもつまるところ、臨床的な感性を磨くことがいかに大切であるかを感じたということであろう）。

文章はごく平易な日常語でつづられていて、分かりやすいのもこの本の特徴といえるだろう。

昔、寺田寅彦氏の言葉で「どんなにむつかしい物理学の現象でも日常語で説明できなければ意味がない」というのがあるが、本書はそれに類するトーンで書き述べられていて心地よい。本書はまた安易に「発達障害」という言葉を使うことへの静かな批判でもあり、またそれが意味する所についての啓蒙の書でもあらうと思う。

（おぐら・きよし／クリニックおぐら）  
小倉 清



弘文堂  
2018年  
3,200円（税別）